

—— 令和元年度 ——
建専連全国大会

講演録

魅力ある建設産業に向けて
～担い手確保のために専門工事業をどう変えていくか～



令和元年11月
一般社団法人 建設産業専門団体連合会

はじめに

本冊子は、令和元年11月13日(水)に日本消防会館ニッショーホールで開催された令和元年度全国大会における主催者挨拶、来賓挨拶、基調講演「建設産業の未来をどう考えるか～建設専門工事業の明るい未来を目指して～」(佐々木基氏)、特別講演「人は嬉しくて、会いたい人が居るところに集まる」(大久保俊輝氏)の内容を取りまとめたものです。

建設業の将来に向けた諸々の課題における解決策の一助となる内容と思いますので、ご活用頂ければ幸いです。

一般社団法人 建設産業専門団体連合会

魅力ある建設産業に向けて

～担い手確保のために専門工事業をどう変えていくか～

日時 令和元年11月13日(水) 13:00～16:00

場所 ニッショーホール(所在地:東京都港区虎ノ門2-9-16)

1. 開会 13:00～

2. 主催者挨拶

(一社)建設産業専門団体連合会 会長 才賀 清二郎

3. 来賓挨拶

| | |
|-----------------|---------|
| 国土交通大臣 | 赤羽 一嘉 氏 |
| 厚生労働副大臣 | 稲津 久 氏 |
| (一社)日本建設業連合会 会長 | 山内 隆司 氏 |
| (一社)全国建設業協会 会長 | 近藤 晴貞 氏 |

4. 基調講演 13:30～

【テーマ】「建設産業の未来をどう考えるか
～建設専門工事業の明るい未来を目指して～」

【講師】(一財)建設業振興基金 理事長 佐々木 基 氏

5. 特別講演 14:50～

【テーマ】「人は嬉しくて、会いたい人が居るところに集まる」

【講師】亜細亜大学 国際関係学部 国際関係学科 特任教授 大久保 俊輝 氏

6. 閉会挨拶 15:50～

(一社)建設産業専門団体連合会 副会長 岩田 正吾

7. 閉会





一般社団法人 建設産業専門団体連合会 会長

才賀 清二郎

ただいまご紹介をいただきました、建専連の会長を仰せつかっております才賀でございます。令和元年度一般社団法人建設産業専門団体連合会全国大会の開催に当たり、一言、ご挨拶申し上げます。

まず初めに、台風19号等で被災に遭われた皆様方へ心からお見舞いを申し上げますとともに、失われてしまった尊い人命に謹んで哀悼の意を申し上げます。

また、建設企業を含め、災害復旧に尽力されておられる皆様に深く感謝を申し上げます。

本日、このような、全国各地から建設産業に携わる多くの皆様のご参加をいただき、かくも盛大な大会ができますことを心より厚く御礼申し上げます。

また、公務ご多忙のところ、ご来賓として、国土交通省から赤羽一嘉国土交通大臣、厚生労働省から稲津久厚生労働副大臣、一般社団法人日本建設業連合会から山内隆司会長、一般社団法人全国建設業協会から近藤晴貞会長を初め、参議院議員の佐藤信秋先生、参議院議員の足立敏之先生ほか、関係諸団体の代表者など多くの方々にご臨席を賜り、深く感謝を申し上げます。

近年、台風を初め、甚大な被害をもたらしている自然災害は、年々規模が大きくなってきており、国民が安全・安心して生活できる社会基盤の整備は、国が取り組むべく最優先事項の1つとなっているのも過言ではありません。しかし、その担い手たる建設業においては、少子高齢化が大きな社会問題となる中で、工事の中心を担う技能労働者の減少に伴って、円滑な事業執行への影響などが危惧されているところでございます。

また、現状においては、建設業界は、若者が安心して飛び込んでもらえる魅力ある産業にはほど遠く、その実現には多くの課題を抱えております。その課題に向け、働き方改革による週休二日制の推進、社会保険未加入企業の建設業許可更新を行わない、専門工事企業、技能労働者の適正な評価について、国及び民間、総合工事業者、専門工事業者を挙げて取り組みが大きく動き出しております。

通算して第20回目となる本年度の全国大会も、「魅力ある建設産業に向けて ～担い手確保のため専門工事業をどう変えていくか～」をテーマに、特別講演、基調講演を企画し、建設産業専門工事業者の取り組みの一助となる重要な場として開催しております。

今、我々専門工事業者に課せられる使命は、ことしの全国大会のタイトルにもありますとおり、「担い手確保のため専門工事業をどう変えていくか」であり、つまり、我々が率先して働き方を変えていき、若者が率先して入ってもらえる魅力ある建設産業にしていくことです。そのためには、昨年5月の総会において決議した技能労働者の直用化や月給制などの取り組みの推進。適正利潤を確保し、技能や経験に見合った給与の引き上げ。安値受注をくり返し、指値をしてくる企業とはつき合わない。登録基幹技能者・技能労働者の技能の見える化に合わせた建設キャリアアップシステムの加入促進。働き方改革における週休二日制の積極的な取り組み・若手技能労働者の確保・育成に待ったなしの気持ちで一丸となって取り組んでいくほかありません。

ぜひ、今日ご参加の皆様におかれましても、我々の決意にご理解とご協力をいただきたくお願い申し上げます。

この後の第2部では、建設産業における人材確保・育成の推進など多くの取り組みにご尽力をいただいている一般財団法人建設業振興基金理事長の佐々木基様に、「建設産業の未来をどう考えるか ～建設専門工事業の明るい未来を目指して～」と題してご講演をいただきます。

第3部では、みずからの教員経験を生かして、人材育成で多方面にわたり活躍されております亜細亜大学国際関係学部国際関係学科特任教授の大久保俊輝様に、「人は嬉しくて、会いたい人が居るところに集まる」と題してご講演をいただきます。

短い時間ではありますが、最後までご清聴いただきますようお願い申し上げます。

最後に、建設産業として、災害の復旧・復興にはもちろん、国民の生活や社会経済を支える不可欠の産業であり続けるため、産官学、それとそれぞれの関係者のご協力をお願いするとともに、本日、ご参会の皆様方のますますのご健勝を祈念し、簡単粗辞でありますけれども、開会の挨拶にかえさせていただきます。令和元年11月13日、一般社団法人建設産業専門団体連合会会長、才賀清二郎。

本日は、ありがとうございます。よろしく申し上げます。(拍手)



国土交通大臣
赤羽 一嘉

皆様、こんにちは。高いところから失礼をいたします。国土交通大臣を拝命いたしております、衆議院議員の赤羽一嘉でございます。

本日は、ここに、建設産業専門団体連合会の令和元年度全国大会が、全国からこのように多くの皆様がお出席をされ、盛大に開催されますことを、まず心よりお慶びを申し上げる次第でございます。

また、本年も、台風や大雨の影響による水害が頻発し、全国各地で多くの甚大な被害に見舞われております。お亡くなりになられました方々へのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された全ての皆様に心よりお見舞いを申し上げる次第でございます。

私は、大臣就任直後から、台風15号、17号、19号、21号の全国の被災地の視察を続けておりますが、全ての現場と言っていいほど、ほとんどの現場で、建設業に携わる皆様が、みずから被災されながらも、真っ先に現場の最前線に駆けつけていただき、そして懸命に復旧・復興に当たっていただいていることを目の当たりにいたしました。

被災自治体の首長さんも異口同音に、建設業の皆様への感謝の気持ちを語っておられました。皆様が、まさに地域の守り手として現場に密着し、日本を支えてくださっていることについて、改めて感謝を申し上げる次第でございます。

また、建設産業専門団体連合会の皆様は、33もの専門工事業団体を束ねて代表する団体として、平素より建設業の担い手確保や育成に多大なご尽力をいただいていることにつきましても、この場をおかりいたしまして、重ねて感謝と敬意を表する次第でございます。

さて、我が国の建設業は、日本の国土、経済を支える重要な産業であるにもかかわらず、現在、担い手の確保という大変大きな課題に直面しております。国土交通省としては、処遇改善、働き方改革、そして生産性向上に取り組み、建設業が、給与がよく、休暇が取れ、希望が持てる、いわゆる新3Kと言われる魅力的な産業となるよう、取り組みをさらに加速させていく必要があると考えております。

そのため、まずは、これまでの太田昭宏元国土交通大臣、石井啓一前国土交通大臣が7年連続で公共工事設計労務単価を引き上げてまいりました。しかしながら、まだまだ現場の職人の皆様の賃金上昇にはつながっていないのではないかとの声もお聞きするところでございます。労務単価の引き上げの効果が現場の皆様に行き渡りますよう、元請を含めた業界全体の取り組みを支援してまいりたいと思います。あわせて、適正な工期の確保や発注の平準化など、さきの通常国会で改正されました品確法を初めとする新・担い手三法の着実な施行の準備を進め、若い皆様に、建設業界に入職していただく環境を整えてまいります。

しかしながら、例えば週休二日の確保については、現場の職人の皆様の多くが日給月給制ということなどもあり、なかなか一足飛びに実現するものではないということも認識しております。こうした現状を踏まえつつ、若い方々に建設業を選んでいただけるよう、発注者、元請、下請の皆様など、業界全体が一体となって環境整備に取り組んでいく必要があると思っております。

国土交通省といたしましても、直轄事業で最大限対応させていただくことはもちろんのこと、民間の発注者に対しても、適正な工期での発注等が実現されるよう、工期の基準の策定等を進めてまいりたいと思います。

さらに、若い世代にキャリアパスと処遇の見通しを示し、技能と経験に応じて給料を引き上げていくため、ことしの4月より本格稼働した建設キャリアアップシステムを業界共通の制度インフラとして育て上げていく決意でございます。地域の担い手として、額に汗して真面目に働いていただき、そして、防災・減災・国土強靱化を現場で支える建設業の皆様の労働環境が改善され、将来の担い手たる若い入職者がふえる環境を整えることにより、安全・安心な社会をつくり上げていくため、国土交通省としても全力で取り組んでまいります。そのためにも、建設業の皆様とともに取り組みを進めていくことが不可欠でございます。皆様方には、引き続き一層のご協力、ご指導を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

結びに、一般社団法人建設産業専門団体連合会のますますのご発展と、本日ご列席の皆様のご健勝、ご活躍を心よりご祈念申し上げます、私の挨拶とさせていただきますと思います。

本日は、大変おめでとうございました。今後とも、どうかよろしく願いいたします。(拍手)



厚生労働副大臣
稲津 久

ただいまご紹介をいただきました、厚生労働副大臣の稲津久でございます。本日ここに、建設産業専門団体連合会の令和元年度全国大会が盛大に開催されますことを、心よりお慶びを申し上げます。

近年、全国各地で大規模な自然災害が数多く発生しております。直近におきましても、台風15号、19号などによる豪雨災害により、多くの方々がお亡くなりになりました。この場をおかりして、お亡くなりになりました方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災地にいち早く駆けつけ、現場で活躍をされる建設事業主及び建設労働者の皆様に対し、心より敬意を表させていただきます。

また、才賀清二郎会長を初め、本日ご列席の皆様におかれましては、厚生労働行政、とりわけ建設業における雇用管理改善の推進に多大なご理解とご協力をいただいておりますことに、改めて厚く御礼申し上げます。

さて、本年4月から、働き方改革関連法が順次施行されており、建設業においても、建設労働者の長時間労働の是正や多様で柔軟な働き方の確保、処遇改善や生産性向上など、若者の心を引くような、より魅力のある産業に変えていくことが求められております。このような中、貴会におかれましては、これまでも専門工事業の中核的な団体として、建設業の担い手の確保と育成、建設技能労働者の労働条件の改善などにご尽力をいただいております。

また、本日の全国大会では、「魅力ある建設産業に向けて ～担い手確保のため専門工事業をどう変えていくか～」をテーマに、建設業界における専門工事業の将来を担う者が夢と希望を持って入職できる環境の整備について、基調講演と特別講演が行われるとお伺いしております。

本日の全国大会が、令和という新しい時代にふさわしい、建設業の働き方を生み出す契機の1つとなることをご期待いたしております。

厚生労働省といたしましても、本日お集まりの皆様とともに、夢と誇りを持ち、安心して建設業で働くことができる環境づくりに引き続き取り組んでまいりますので、ご理解、ご協力をお願い申し上げます。

結びに、貴会のますますのご発展と、本日お集まりの皆様のご健勝とご活躍、そして、この

大会が実り多きものになりますことをご祈念申し上げまして、私の挨拶といたします。令和元年11月13日、厚生労働副大臣、稲津久。

おめでとうございます。(拍手)



一般社団法人 日本建設業連合会 会長
山内 隆司

ただいまご紹介をいただきました、日本建設業連合会の山内でございます。ご挨拶に先立ち、さきの台風及び豪雨の被害に遭われた皆様に謹んでお見舞いを申し上げますとともに、被災地域の日も早い復興をお祈りいたします。

改めまして、このたび、一般社団法人建設産業専門団体連合会全国大会が、かくも盛大に開催されましたことを、心よりお慶び申し上げます。

本日のテーマである専門工事業における担い手確保は、建設業界が将来にわたり、わが国の経済発展を支える基幹産業として、国民の安全・安心を実現する社会的使命を果たすための適正な施工体制を維持していく上で喫緊の課題となっております。7年連続となる公共工事設計労務単価の引き上げをはじめとした、建設技能者の処遇改善に向けたさまざまな国土交通省様の施策により、労務賃金は上昇基調で推移しております。しかしながら、一方で、依然として他産業と比べて高齢化が顕著である状況は継続していることから、業界一丸となって、若年層を中心とした新規入職の一層の促進を図る必要があると考えております。

当会といたしましても、建設業の魅力向上につながる施策として、建設キャリアアップシステムの普及を最優先課題に据え、現場登録やカードリーダーの設置を進めるとともに、会員企業の協力会社における登録作業の支援を展開するなど、元請団体として、キャリアアップカードが有効に活用できる環境整備に注力しております。

また、今後、国土交通省の直轄工事で実施されるモデル工事についても、本システムの効果や課題の検証を通じ、建設技能者がメリットを実感できるツールとなるよう、積極的に協力してまいります。

さらに、本年8月に行われました国土交通省と建設業界団体との意見交換会におきましても、才賀会長とともに、国土交通省の直轄工事における登録要件化について提案させていただいたところであり、引き続き、本システムが早期に浸透するよう、あらゆる手だてを講じてまいる所存でございます。

こうした取り組みは、当会だけで成果が得られるものではなく、貴連合会及び専門工事企業の皆様と手を携えて推進していくことが肝要であると考えておりますので、今後とも、多岐にわたり連携をさせていただきますようお願い申し上げます。

結びに当たり、貴連合会並びに会員各社様のますますのご発展、そして、本日ご臨席の皆様方のご健勝を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

本日は、おめでとうございます。(拍手)



一般社団法人 全国建設業協会 会長
近藤 晴貞

皆さん、どうもご苦勞様です。ご紹介をいただきました、全建の近藤でございます。令和元年度一般社団法人建設産業専門団体連合会の全国大会が、このように盛大に開催されましたことを、心よりお祝い申し上げます。

さて、皆様ご承知のとおり、今年度は、働き方改革関連法案や新・担い手三法の成立、建設キャリアアップシステムの本格運用開始等、建設業界では大きな転換期を迎えているところでございます。

このような中、建設産業における担い手の確保・育成は喫緊の課題であり、私ども全建でも積極的に取り組んでいるところでございます。

今年の貴会の大会テーマにあります「魅力ある建設産業」として担い手を確保していくためには、就労環境の改善など、働き方改革への対応が重要な課題であります。

私ども全建では、一昨年、働き方改革行動憲章を策定いたしまして、「休日 月1 + (ツキイチプラス) 運動」、「単価引き上げ分アップ宣言」、「社会保険加入促進」を、目下、重点課題として取り組んでいるところでございますが、「社会保険加入促進」につきましては、ほぼ満足のいく状態に、「休日 月1 + (ツキイチプラス) 運動」、「単価引き上げ分アップ宣言」につきましては、普及促進を図っており、徐々に浸透している状況でございます。さらなる進捗を目指して、諸課題の解決に向けて活動を展開しているところでございます。

建設産業は、社会資本の整備、維持の担い手として、また、近年激甚化している災害での応急復旧や除雪作業など、地域の経済活動や安全・安心なまちづくりの守り手としての重要な役割を担っております。その社会的使命を将来にわたって果たしていけるように、若者が建設業に夢を持ち、将来を託せる魅力ある産業として担い手を確保し、次世代につないでいかなければいけないところでございます。そのためには、専門工事業や総合工事業などの垣根を越え、建設産業にかかわる全ての人々が一致団結し、オール建設業で課題解決に取り組んでいく必要がございます。私ども全建といたしましても、今後とも、皆様とともに力を合わせ、魅力ある建

設産業に向けた取り組みを積極的に進めてまいりたいと思っておりますので、何とぞよろしく
お願いいたします。

結びになりますが、本日の大会が皆様にとって有意義なものになりますことと、ご参会の皆
様の社業のご隆盛と、皆様のますますのご健勝をご祈念申し上げ挨拶とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございます。(拍手)

基 調 講 演

建設産業の未来をどう考えるか ～建設専門工事業の明るい未来を目指して～

一般財団法人 建設業振興基金 理事長

佐々木 基



ただいまご紹介いただきました、建設業振興基金の佐々木でございます。非常に大事な講演でございますのに、ちょっと風邪をひいておりまして、お聞き苦しいかと思いますが、どうかご勘弁いただきたいと思っております。

きょうは、「建設産業の未来をどう考えるか」ということで、「建設専門工事業の明るい未来を目指して」という副題でお話をさせていただくわけでございますけれども、先ほどの式典の中でも、来賓の方々のご挨拶にもありましたように、何と言いましても、これからの建設産業の抱える最大の課題は人手不足だということでございます。私も、いろいろなところでお話をさせていただく機会があるのですが、どうしても、「人が足りなくて大変だ」とか、そういう口調になってしまうものですから、ある人から、「佐々木さん、聞いていてもっと未来に明るさを感じられるような話になりませんか」というようなことを言われまして、それもそうだなということで、きょうは、人口減少下でなかなか厳しいかもしれませんが、建設業界、これから捨てたもんじゃないぞというような、明かりが見えてくるようなお話ができればいいなと思っているわけでございます。

そういう話をしますと、まず出てきますのは、子どもたちに、大人になったら何になりたいと思うかということです。こういうアンケートというのは至るところでやっておりますが、ここにご紹介するのは、第一生命が、保育園とか、幼稚園とか、小学生の男子に聞いて、それを集計したものでございます。第一生命以外のところでやっているのをみましても、大体、同じように、将来、大工さんになりたいという声が、5位から10位ぐらいに入ってくるという結果になっております。

要は、最近では、アンケートをとると、ユーチューバーになりたいという答えも順位に入ってきているようでございますけれども、こういった、大工さんになりたいという、子どものころに感じた、これは、多分、ものづくりというものに対する、子ども心ながらの憧れのようなものがあると思うんですけれども、そういったものを、持っている人がかなりいるということだと思いますので、そういった夢をかなえていけるような環境、あるいはそういった夢を、将来、持ち続けられるような人たちを育てていくことができる環境を作っていければいいなというふうに思っているわけでございます。

次に、これは役所のほうでつくられている資料でございますが、よくある資料でございますけれども、建設投資額です。建設投資にどのくらいお金をかけているかということと、建設業に就業する人の数というのは大体平行なんですけれども、民間・公共を合わせて投資額が一番大きかったときが84兆円でございまして、このころは非常に多くなった投資にあわせて、建設技能者の方々も技術者の方々も事務の方々も人がふえていたわけでございます。

ところが、ある時点から急激に建設投資額が減ってまいりまして、一番低いところは、半分の42兆円ぐらいに減ってしまいました。当然、仕事が減るわけですから、人を減らさざるを得ないということで、どんどん人が減っていったわけでございます。

今は、だいぶ持ち直してきたといいますが、建設投資額も復活してまいりまして、57兆円ぐらいというふうに伺っていますけれども、そうすると、42兆が57兆になったので、それに合わせて人もふえるかと思うと、さにあらずでございまして、1つは、もともと人が減ってきている、高齢化してきているということもあるんですけれども、一度、建設業界から外へ出ていってしまった人はなかなか戻ってこないということがあります。それから、先ほど来もだいぶ話題に出ておりましたけれども、若い人が入ってこない。

加えまして、雇用する経営者のほうも、建設業の将来、あるいは自分の会社の将来に対して、仕事が確保できるかどうかという自信が必ずしも持てないものですから、雇用をためらうという状況もございまして、建設投資額がふえているわりには、人はふえていないのです。

そうした中で、最近の傾向としましては、建設業就業者は、若干、ふえております。平成22年498万が、平成30年503万になっています。技術者のほうも、若干ですが、平成22年31万人が30年に33万人とふえております。

日本全体の話としても、就業者は、最近、ふえぎみなんですけど、これは、今まででしたらリタイアしていた高齢者の方が、依然として仕事をお続けになる。あるいは、女性がかなり労働マーケットの中に出てきているということもありまして、人口は減ってきているんですけれども、就業者数はふえているという状況があらわれていると思うんですが、それでも、残念ながら、技能労働者は、平成22年331万が平成30年328万と、やっぱりずっと落ち続けているということでございます。

次に、よく「ワニの口」というふうに言われておりますけれども、年齢別の就業者割合をみたときに建設業の場合に、どれだけ高齢化しているか、それに対して、若い人の割合がどれだけ減ってきているかをほかの産業と比べて、「建設業は少子高齢化が10年先行している」と、言われているわけでございます。

ちょうど建設投資がぐーっと伸びていたころは、若い人をどんどん雇用していたころで、このときには、高卒の人たちが年間4万人、建設業界に入ってくれていました。それからずっと冬の時代を迎えたわけですが、最近はちょっと持ち直しています。これは、あまり変化は大きくないものですから見逃されがちなんですけど、私は、この部分に一筋の明かりが見えるような気がしているわけでございます。

どん底は、高卒の人が、1万人位しか建設業界に入ってきてくれない状況でした。ピーク時

の何と4分の1しか高卒の人が入ってこなくなってしまうわけです。

今は、1万5千人ぐらいの方が建設業界に入ってくれるようになってきています。これは結構大きな話だと思います。後でもご紹介しますが、業界を挙げて、行政とも手を組んで、若い人に入ってもらおうという努力をしています。業界も、団体もそうですが、各企業さんも、いろいろ努力されています。それによって、若い人が入りやすい環境ができてきている結果であればいいというふうに思うわけでございます。もちろん手を抜けば、またひどい状況になるとは思いますけれども、いわゆるどんぞこの状況からは少し脱して、上昇しつつあるんじゃないかなと、そんな気がしているわけでございます。

ほかの産業と比べてどうかということですが、ものづくり系の産業はみんな苦戦しています。農業、林業、それから製造業、これはみんな苦戦してまして、2000年から、特に2010年にかけてというのは、皆それぞれ、就業者の割合を相当落としてきております。

最近の2018年のデータを見てみますと、実は、建設業というのは、全産業に占める就業者の割合は17.5%になっていますので、数字は若干よくなっているんですね。ところが、農業、林業とか製造業のほうは、またさらに数字を落としております。一方、サービス業関係のほうは数字が上がってきてまして、就業者がふえているということなんです。

このことを考えますと、ものづくり、全体的に大変苦戦しているんですけども、建設業に限って言えば、これも先ほど言いましたように、本当に苦しい、厳しい時期を脱しつつあるんじゃないかなという、楽観的かもしれないけれども、そんな気配が見えるような気がしているわけでございます。

次に、先ほども今の建設業の企業経営者が、将来、仕事があるだろうか、あり続けるだろうかということに気にされているのも、若い人を採用しない1つの原因かなというお話をさせていただきました。これは、本当に信じられない話なんですけど、聞いた話によりますと、今、どこも若い人を入れたいので、子どもたちにも業界の人たちはアプローチしてまして、子どもたちにアプローチするということは、父兄の方にアプローチするということになるわけなので、建設業の紹介とか、現場見学会などいろいろするんですけども、そのときに付き添って来られたお母様が、「建設業って、これから仕事あるんですか」というようなことを、これは、非常に真面目に言われるということを知りました。常識的に、ここに集まりの方々はそのですけども、私どもが考えても、大体、古今東西、建設業というものは最も基礎的な産業でございますので、これがないと人間生活は成り立たないので、仕事なくなるなんていうことはあるはずがないと思うのですけれども、一般の方からすると、建設業の仕事って、これからあるんだろうかと本当に心配されている方もいらっしゃるようなんです。

そういうこともあって、特に、来年、オリンピックがありますので、オリンピックが終わった後、仕事があるのかということに気にされている方もいらっしゃるものですから、これは、別の場所でもちょっとお話をさせていただいたのですが、オリンピック直後は、1964年の前回の東京オリンピックの後のような不景気になることは、まずないだろうということは、有識者の一致した見解です。では、もうちょっと先の10年後を見て、2030年までどうなんだろうということで、建設経済研究所という、将来の建設業の動向について調査研究している専門機関がありますので、そこで、一応、推計を立ててもらいました。

今、皆様方のお手元にある資料は、ちょっと古い資料になっていまして、これを新しいデータで推計を見直したところ、お手元にある資料よりもいいほうに推計値が出たということで紹介させていただくのですが、基本的には、今、名目、大体1.3%の経済成長なんですけれども、これを、このまま行くと仮定した場合に、建設市場の縮小は10年内で、5%程度にとどまるのではないかと。逆に経済再生が成功すれば、場合によっては6%の拡大の可能性もあるということなのです。

要素別にみますと、やっぱり、人口が減ると一番影響を受けるのは住宅です。ですから、住宅のほうは減少してしまうのですけれども、それでも、世帯数は、2030年でも大体同じレベルではないかということです。

それから、店舗につきましては、インターネット販売の影響がものすごく大きくて、残念ながら間違いなく店舗は減っていくだろうということではございます。

しかし、あとは、事務所にしましても、やや増加とか、工場にいたしましても、横ばいとか、倉庫に至っては、このネット販売ということになると、多頻度輸送ということになりますので、当然、倉庫が重要になってくるわけでございます。また、今、高速道路がどんどん整備されてきていますけれども、高速道路が整備されますと、当然、その道路整備の進展に伴いまして、物流拠点ができるということもございますので、倉庫は大幅にプラスだということなので、人口がこれから減っていくといっても、それほど大きな経済の減少にはつながらないのではないかとこの予想でございます。

そして、問題は、公共投資でございます。一応、これは横ばいというふうに予想していますが、皆様、よくご案内のとおりでございまして、災害対策、災害復旧対策が鍵になります。台風15号、19号等で大変な災害が起きております。大変悲惨な状況になっているわけですが、この災害の軽減に先代の人たちが営々とハード面を整備してきたことが寄与しているわけではございます。東京ですと、首都圏外郭放水路とか、八ッ場ダムといった大きな構造物を整備してきたことが、こういう危機的な状況のときに被害の軽減に役立つということが証明された

わけでございます。

ご案内のとおり、国土強靱化の緊急対策ということで、3年間7兆円ということで事業が進められておりますけれども、この近年の激甚化した災害、あるいは広域化した災害を見ますと、恐らく、ここにいらっしゃる皆様方も、この3年間で対策が終わって、はい、それまでよというわけにはいかないだろうということはお思っていると思います。私もそう思っております。したがって、どのくらいのレベルになるのかわかりませんが、災害対策というのは、これから一層推進していかなければいけない。インフラの最も基本的な部分として、やっつけなければいけないだろうと思っております。

それから、外国人の話がございます。今、技能実習生というのが28万人なんですけれども、実は、あまり御存知ないかもしれませんが、日本での永住者が76万人いるんです。我が国は、高度な技術を持つ人間にはどんどん海外から来てほしい、日本の経済成長を助けてほしいという方針でございますので、これからますますふえていくということになると、ある一定部分、日本人の人口減少を補う部分が出てくるかなというふうに思いますし、外国人ということで言いますと、観光客が、ご案内のとおり非常にふえてきております。

宿泊施設を見てみましても、何と、2010年ころまでは年間1,000億円ぐらいの工事契約額にも満たなかったんですが、今は、1兆円を超えるような契約額が出てきております。

今、ちょっといろいろ、国際的な問題もございまして、政府の目標としては、2030年には6,000万人の観光客を迎え入れようというふうでございますので、当然ながら、この宿泊施設等、観光関係の施設の需要というのは、これからますますふえていくだろうと思っております。

それから、マンションにいたしましても、事務所にいたしましても、それぞれの機能を高度化していきますので、当然、それに伴う事業が出てくるということでございまして、エネルギー関連につきましては、原子力発電については非常に厳しい状況が続いておりますけれども、風力発電でございますとか、太陽光発電でございますとか、そういったいわゆる新しい技術を導入した施設も、これから次々と出てくると思います。こういうことを考えますと、これから人口が減っていくにしても、日本が安全・安心を保ちながら一定の経済成長を保っていくために、建設業が関与する仕事というのは山ほどあるというのが現実ではないかと思っております。

そういう意味では、これから仕事なくなるということは、全くないというふうに自信を持っていただきたいと思うわけでございます。

そうしますと問題は、どれだけ建設業に従事していただける人をふやしていくかということだと思いますが、おもしろいデータを御紹介したいと思います。国土交通政策研究所というところが、一昨年調査をしまして、工業高校3年生に、建設業に対するイメージはどうですか

ということを知ったのですが、非常におもしろいのは、建設業に触れる機会があった高校生と、なかった高校生でアンケートの結果がどう変わるかということを知っているわけです。建設業に触れる機会というのは、皆様方も、最近、かなり行っていると思うんですけども、例えば、現場の実習とか、見学会とか、あるいはインターンシップとか、出前講座とか、そういったことで、建設業に触れた人たちと、そういう機会がなくてアンケートに答えてくれた人たちで、実は大きな差が出ているわけです。この機会を受けなかった高校生の建設業のイメージは、1位は、物をつくる喜びがある産業だというイメージで、これは非常にいいんですけども、その次が、肉体労働が多くて、汚れ作業が多い、そういう産業だと。3番目は、危険作業や事故が多い、そういうイメージだということで、これは、旧3Kというんですかね、「きつい、汚い、危険」そのままなんです。工業高校ですから、しかも土木・建築系ですから、ある程度、知識としては、どういう仕事かわかっているはずだと思うんですけども、そういう人たち、そういう生徒でも、そんなイメージを持っているのです。

一方、建設業に触れる機会を持った人たちはどうかといいますと、第1位は物をつくる喜びがある産業だということは同じなんですけれども、第2位は、建築物、建設物が後世に残る、後世に残るものをつくっている産業だというイメージで、3番目が、地域社会や人の役に立つ産業だというイメージだということなんです。その他にも、スケールが大きい仕事だというイメージがあるとか、将来、発展しそうだというイメージが上位にきて、その次に初めてマイナスのイメージが出てくるのですが、しかも危険だとか汚いということではなくて、休日が少ないというイメージが、出てくるわけです。

ということで、肌で、建設業に触れる機会といっても、そんなにみっちり触れたわけじゃないでしょうけれども、これだけ見ましても、建設業に触れる機会があったか、なかったかということによって、これだけ、持つイメージに差が出てくるということは非常に驚きだと思うんです。

ですから、皆様方が出前講座をやったり、インターンシップをやったりとか、いろいろご努力されて、仮に、それが成果が直には出なくて、直ちに人が入ってこないにしても、そういうことをやることによる、受けた人たちのイメージの変化というのは必ずあるんだということは、これ、皆様方がこれから採用のためのいろいろな運動をやっていく上において、非常に参考になるのではないかなという気がしているわけでございます。

また、いわゆる旧3Kと言われてきたことがらにつきましても、これは、私よりもはるかに皆様方のほうがよくご存じだと思うんですけども、非常にいろいろ工夫をされてきて、改善されてきています。

きついということと言えますと、特に夏が非常に暑いので、例えば電動ファン付きの作業服とか、そのほかにも、今、いろいろな工夫が始まっております。もちろん、しっかり休憩を取るとか、そういうことも大事なんですけれども、物理的にも、こういうことが作業服などでできております。

それから、特に高齢化をしてきているということもあって、人間の動力の補助として、パワーアシストスーツ。これは、中腰でいろいろ物を上げ下げするというときに非常に力になるということで、25キロから30キロという強い補助力がある。こんなものも出てきているということでございます。

汚いという面に関して言いますと、快適トイレというのが、できてきております。これは、標準仕様というのを、国交省のほうでもうつくられているのではないかと思うのですけれども、女性が働きやすい環境になるということは、当たり前ですが、男性にとっても、非常に働きやすい環境になるということもございますので、若者にも非常に受けるわけでございます。

それからユニフォームも、今、非常にカラフルな、それこそファッションショーじゃないかと思われるような、カラフルなユニフォームもできてきております。ある意味、若い人を引きつけていくというのは、イメージ戦略のところもございまして、現場のイメージをすごく高めていくことになるのではないかなと思います。

危険ということにつきましては、これはことしの2月に、労働安全衛生法施行令の改正で、高所のところについては、フルハーネスが原則化されました。聞くところによると、やっぱりまだ、重かったり、夏の日に暑いというようなこともあるようでございますけれども、恐らく技術開発で、非常に使いやすいフルハーネスというものが、これからどんどんできていくのではないかなというふうに思っています。

危険に関して言いますと、建設業にとりまして一番気をつけなければいけないのは、やっぱり事故でございます。確かに、死亡者も相当減ってはきているんですけども、まだ一定数がありまして、最新では309人ぐらいが亡くなっています。そのうち136人の方は、転落とか墜落で亡くなっています。まだ、そういう悲惨な状態があるわけでございますが、これを限りなく0にしていくということで、もちろんそのためには、実際に働く方々の意識の啓発というのは非常に重要だと思いますけれども、本当に経営者の方々は、細心の注意を払って、いろいろ会議を開いたり、皆さんを集めて訓示したり、ちゃんと点検をしたり、そういうことをいろいろやられていますけれども、そういうご努力によって、限りなく0になっていけば、建設業についても、決して危険な産業ではないんだというイメージにだんだんなっていくのではないかなというふうに思っているわけでございます。

この「きつい、汚い、危険」という旧3Kにプラスして、賃金が低いというのがあったわけですが、これは、かつては労務単価がどんどん下がっていた時代がありましたが、今では7年連続で上がってきています。全建設産業の労働者をみると、実は既に製造業を超えているんですね。ところが、生産労働者、つまり技能労働者については、まだ製造業に追いついていないわけです。7年かけて上がってきているわけですから、私なぞが思いますと、もう製造業を超えていてもいいのではないかなと思うんですけれども。

先ほどのご挨拶にもありましたけれども、賃金が上がらないと、仕組み上、労務単価は上がらない仕組みになっていますので、賃金を上げなければいけない。ところが、労務単価を上げているけれども、まだ賃金レベルが不十分だということには、もちろん、労務単価はこれからも上げていっていただきたいということもありますけれども、しっかり技能者のほうにお金がわたるような仕組みにしないといけないということがあると思います。これは、必ずしも元請だけの責任ではないと私は思っております。今、下請も重層下請構造になっていますので、気をつけないと、その下請の間で、せっかく上げた労務単価が下まで行き渡らないというような現象もあるのではないかと。したがって、これは元請の責任だと言うだけではなくて、専門工事業の方も含めて、もちろん労務単価を決める行政もそうですけれども、皆さんで賃金を上げていくという、そういう運動をこれからますますしていかなないと、賃金が上がらない。賃金が上がらないと労務単価が上がらないということになってしまいますので、ここはぜひぜひ、皆さんには心していただきたいと思っております。

次に休暇についてですが先ほど、高校生のアンケートがありましたように、若い人たちは、給料よりも休暇、休日、労働時間なんですね。全建さんが調査をされまして、現場において11.3%が週休二日制になっているということがありました。現場では非常に難しいところがあることは承知しておりますけれども、他産業ははるかに週休二日制が進んでおりますので、これは、いろいろ工夫して頑張ってください、週休二日をふやしていかなければいけないだろうと思っております。

ちょっと外れますけれども、次に、どのくらい外国人を使っているかという話に移りますと、建設業は先ほど言いましたように、仕事がふえてきていて人はふえない、しかも、新人を採用して恒常的に長く雇うということには自信がないということで、比較的、ほかの産業に比べると、外国人を使う場面が多くなってきているわけですが、しかし、今後、東南アジアの諸国も、それぞれ人口減少になったり、若い人が減っていくというような状況もございますし、それぞれ生活水準が上がっていくというようなこともございますので、安いから使うということでは、もうこれからは成り立たないわけですが、外国人を使う場合にも、長期的に、その企業

の戦力として、日本人と同じように活躍してもらって、あわよくば、その企業が海外で活動したりするときに先兵になってもらうとか、そういう、戦略的に対応していくことが必要かなと思っっているわけでございます。

今まで一般論をご説明してまいりましたけれども、これからご紹介するのは、個々の企業について、こういう工夫をしているというご紹介です。これからご紹介する企業は4つありまして、皆さんお聞きになっている企業も、そうではないところもありますけれども、何れも、新規採用が確実にできている企業でございます。言ってみれば、こういうことをやると、新しい、若い人たちに入ってきてもらえるんだなという1つの参考になるのではないかと思います。これは、一応、それぞれの会社にお断りをいたしまして、会社名も全部出させていただきます。お断りしております。

1つめは、とび・土工をやっているらっしゃる鈴木組さんです。ここは、ホームページづくりや学校への実習協力ということをやって、とにかく、生徒が来る来ないに関係なく全国の学校を訪問して、会社について知ってもらい、その後、たとえ人が来なくても、継続して会社の情報というのをその学校に送っていくということをやっているそうです。

また、ここが特徴的なんですけれども、元請の協力や厚生労働省の助成金によって訓練校をつくりまして、全寮制なんですけれども、何とそこで1,600時間のカリキュラムで、1年間、学ばせています。

こうすることによって、人を育てると同時に、チームワークとか、コミュニケーションを深めていくということをやっています。

また、キャリアを評価した職能手当、スーパー職長制度などを通じて、やる気を引き出させているとか、あるいは、技能工昇進モデルプランというのをつくりまして、それに基づいてキャリアパスを示して、頑張れば、将来、こうなるよというようなことを伝えているそうです。このようにこれから来てくれる高校生が、ここなら長く安心して勤められるというふうに見えるような工夫をしているということでございます。

次が、これはマツザワ瓦店でございますが、やっぱり瓦屋さんというのは、今、非常に厳しい状況でございます、どんどん廃業していく状況でございます。それがゆえに、台風が来て瓦が全部飛んでしまっても、直してくれる業者がどこもないというような状況に陥っているわけでございますけれども、御多分に漏れず、マツザワさんのところも瓦ではなかなか企業が成り立たないという状況になってきておまして、何をやっているかといいますと、太陽光とかLPガス発電の、屋根に関係あると言えばあるんですけれども、こういった分野にも手を出しています。その際に、なかなか日本人に来ていただけないものですから、フィリピンから技能実習生に来ていただいて、そこで教育をするんですけれども、非常にレベルが高いものです。

から、必ずしも技能者というだけではなくて、技術者としても十分、その人たちが使えるようになりまして、それで海外の施工現場で活躍してもらっているそうです。もちろん、海外で互をつくるわけじゃありませんので、海外では、先ほど言いましたような太陽光発電などの事業を展開しているわけですが、そういったところの技術者兼技能者としてその実習生を使っているということでございます。

それから、次は、これは本当に皆様よくご存じで、ここで紹介するまでもないと思うんですけども、向井建設さんです。非常に規模も大きくて、従業員も多いところでございます。

基本的に、規模の大小を問わず、やっていかなければならないことというのは共通だということがわかるわけでございますけれども、建設業について先生や保護者に正しく理解してもらうために、わかりやすい入社案内本をつくったり、各種SNSでの情報発信で、まずは建設業界の仕事を知ってもらい。それから、向井建設という会社も知ってもらうというようなことでやっていらっしゃるんですが、工業高校のみならず、普通高校までその野を広げて、全国で200校ぐらい訪問して、いろいろ説明をしたりしているということなんですね。説明会で、直近に卒業した卒業生から話をしてもらったり、雇った生徒さんを担当していた先生のところに、その生徒が訪問して情報交換するとか、そういうことをやっているということでございます。それから、育成対象者とOJT担当者で、1対1のOJT教育というものを実施しているということでございます。

ご案内のとおり、向井建設さんは、かねてから、技能実習生というものについては大変熱心に取り組まれています。

最後は大幸建設さんで、これは型枠の会社でいらっしゃいますけれども、ここも同じように、定期的に学校を訪問するとか、あるいは、その学校のOBの方々を訪問するというようなことをやっておりますし、もちろん会社見学会をやって、ものづくりのおもしろさをアピールしています。

それから、現場研修に力を入れていらっしゃいまして、4月から6月に型枠の基本研修というのを行っているんですが、その後、さらに5週間にわたる、これは富士の教育センターを使った研修でございますけれども、これに参加して、7種類の資格を取得しているということでございます。

とにかくやめないようにするためには、やっぱりモチベーションを高めなきゃいけないというようなこともございますので、常にさまざまな資格の取得にチャレンジをしてもらって、技術や知識の向上を実感して、キャリアアップするという目標を持ってもらうということをしています。

建設業の場合、よく、「輸血より止血が大事だ」という言葉がございまして、輸血ということで、若い人に入ってもらうのはいいんですけども、3年で5割の方が出ていってしまうということで、これを止血しないと人が減っていってしまうという深刻な問題があります。これは、全産業でみても例えば高校卒業生で言いますと、今の時代は、4割の人が、3年で大体転職してしまうんですね。建設業は5割なので、さらに深刻なんですけど、ただ、例えば飲食業とか小売業あるいは福祉関係とか、こういうところも極めて厳しい状況でして、場合によっては建設業よりも多い割合で、3年間で転職してしまうというような状況があります。

こういう時代になってきているという中で、さはさりながら、この5割の転職というのをどうやって抑えていくかということ、いろいろな企業が考えられているということであろうと思います。

今、ご紹介した企業も入っているんですけども、私どもが、採用実績が毎年ちゃんとある企業で、例えば、ホームページ上でどういう紹介をしているかとか、そういうことを調べているんですが、最近、専門工事業であっても、月給制というのが非常にふえてきております。

それから、あれだけ難しいと思われていた週休二日制も、かなりのところで週休二日制を採用し始めておまして。そういうところは、継続的にしっかり人が入ってきているということが見られます。

考えてみますと、社会保険にいたしましても、10年前までは、社会保険に入っていないほうが常識だったわけですね。ところが今や、社会保険に入っているのは当たり前で、社会保険に入っていないければ絶対に人は来ないという状況になっているわけです。同じような状況が、これから、多分、この月給制とか週休二日制についても起きてくるだろうなというふうに思っております。そういうことに気がついている企業については、それをどんどん取り入れているわけです。

しかし、例えば働き方改革、週休二日制にしましても、特に仕上げ関係などは、特に民間の建築工事などにつきましては、相当工期が厳しくなるというところがございますので、これは、1つの企業だけではなかなか厳しいかもしれません。業界全体を挙げて、この問題に取り組んでいくことが大事かなというふうに思っているところでございます。

そろそろ時間も終わりに近づいてきているわけでございますけれども、今、申し上げました社会保険の問題にいたしましても、それから労務単価の問題にいたしましても、働き方改革の問題にいたしましても、5年前、10年前までは、とてもそんなことはできないというふうに思っていたことを、企業の方々、業界の方々、それから行政の方々が一体となって、何とかこの産業をサステナブル、持続的なものにしていこうと努力されてきたのが今日だと思っております。その成果は確実に出てきているというふうに私は思うわけでございます。

その最後のツールということで考えておまして、私ども建設業振興基金が運営主体としてやっておりますのが、キャリアアップシステムでございます。これは、先ほどの式典でもいろいろな方からお話が出ましたけれども、技能者にとりましては、今までは、どこでどんな立派な仕事をして、それはご自分の記憶にしかなかったものですね。それをしっかり記録に残し、それによって、今は、まだ、本格運用が始まったばかりでございますので、なかなか実感がわからないかもしれませんが、このゴールドカードを持つようになる人がふえてくると、確実に処遇は上がると私は思っております。

というのは、処遇を、入って1年目、2年目の方からベテランまで全部同じように処遇を上げるなんていうことは、どだいきないわけございまして、そうすると、めり張りをつけて、職人にやる気を起こさしてもらって、なおかつそれを世の中に向かって、うちにはこういう職人がいるということを堂々とPRしていくためには、技能の向上に伴って処遇を上げていかざるを得ない。つまり、給料を上げていかざるを得ないというふうに私は思っております。

職人の方にとっては、今、建設マイスター制度とかいろいろあるんですけども、もっと一般的に、最終的にゴールドカードを持つということが、その職人のステータスになり、それが、その職人の誇りとなるということによって、その職人の方々が頑張る仕事をするような環境ができていくということでございますし、経営する側にとっても、自分のところはそういう職人を抱えている企業だということは大いにアピールできるようになると思います。

恐らく、この制度が進んでいきますと、民間の工事であろうと、公共工事であろうと、自分のところにこういういい職人がいるんだということアピールしなければ、なかなか他社との競争に勝てないという事態が出てくるだろうというふうに思っております。

そういう意味では、品質も上がりますし、それを目指す職人一人一人の技量もアップしますし、若い人の目標にもなるということで、また、実務面では、建退共とタイアップしますので、カードを、1回、ピッとやれば、そこで退職金が310円積み重なっていくと、そういう実益もあるわけございまして、私どもとしては、このキャリアアップシステムというものを、何とかこれを皆さんに広げていきたいというふうに思っております。

今、なかなかものづくり産業、日本全国で苦戦しておりますが、この労務単価の問題、社会保険の問題、働き方改革——働き方改革は全産業に共通ですけれども、それからこのキャリアアップ、こういったことで、行政も含めて、産業界一体となって取り組んでいるというのは、これはまさに建設業の強みでございまして、こういうことが、一等最初に申し上げたような、先に対して若干の明かりが見えてきているのではないかなというところにつながっていると私は思うわけでございます。

最後に、ちょっと3～4分、お時間をいただきまして、このキャリアアップのビデオをご紹介します。よろしくお願いいたします。

(ビデオ開始)

「建設業は、現場で直接施工を担うおよそ330万人の建設技能者によって支えられています。そのうち60歳以上が全体のおよそ4分の1と高齢化が進行する一方で、29歳以下の割合は全体のおよそ1割程度と、若年技能者が減少しており、将来的な担い手不足が懸念されています。こうした中、今後も建設業が地域の守り手として、安全・安心なインフラ整備、メンテナンス、早期の復旧・復興の担い手としての役割を果たすためには、建設技能者について、さらなる生産性の向上が求められています。

建設キャリアアップシステムは、業界全体で、技能者一人一人の技能と経験をしっかりと認め、育てる仕組みです。これから、皆さんが技能者カードを手にしてから、建設現場で実際に使用し、就業履歴がどのように蓄積され、また活用されていくかについてご紹介します。

就業履歴を蓄積する前準備として、既に事業者によって、建設キャリアアップシステムには、事業者の情報や現場の情報、施工体制、作業内容、技能者の立場などが登録されています。

技能者カードを取得されたら、ご自身の就業履歴の蓄積が可能になります。

やっていただくことは、至って簡単です。就業する工事現場に設置されたカードリーダーにご自身の技能者カードをかざします。すると、先ほどの技能者の情報、事業者の情報、現場の情報、作業内容、技能者の立場などの情報が結びつきます。こうして、誰が、いつ、どの現場で、どんな仕事をしたかという就業履歴が蓄積されていきます。

また、技能者カードを忘れた場合は、技能者本人、または所属する事業者によって、インターネット上より直接就業履歴を入力できます。

元請事業者の承認を受けることにより、就業履歴を蓄積することが可能です」。

「今後に期待することを教えてください」。

「はい。就業履歴が蓄積できるということですので、長く働いた人の処遇が改善されればよりよいというふうに思います」。

「現場経験、技能を習得して、ゴールドカードになるように頑張っていきたいと思います」。

(ビデオ終了)

どうもありがとうございました。ぜひ、キャリアアップの普及、よろしくお願いいたします。

(拍手)

特別講演

人は嬉しくて、会いたい人が 居るところに集まる

亜細亜大学 国際関係学部 国際関係学科 特任教授

大久保 俊輝



こんにちは。今、ご紹介いただきました大久保でございます。

学校の先生というイメージがありますが、もともとは、建設省建設大学校中央訓練所（中訓）の出身です。ですから、もともとは建設の関係をしておりました。

この中で、学校の先生に対するイメージが、今、カレー事件がいろいろ起きてますのでね、よくないと思うんですけども、学校の先生に褒められたという経験のある方、どのくらいいらっしゃいます？ 余りいないですね。叱られたという方、どのくらいいらっしゃいます？ はっきり手が挙がりますね。大体、叱られた方がたくさん来ているということですね。ありがとうございます。私も同じような形で、実は、学校の先生に対してイメージがよくなかったですね。何かというと、ちゃんと見てくれてないとか、それから、勉強ができるという子がいい子みたいな形ですよ。本当の優秀な子というのは、例えば掃除を一生懸命やったり、うそをつかないとか、人への思いやりがあったりとか、本来はこれが私は優秀だと思うんですけど、そうではない、まさに、*認知で、数字で比べていくところが優秀ということにされているくらいがありますね。

そんな中で、きょうはお呼びいただきました。実は、私の先輩が菅井専務理事で、菅井先輩から、大久保さん、ぜひ、話してよと、こういう話をいただいたものですから、お言葉に甘えて来させていただきます。ぜひ、おつき合いたいと思います。

これは、中央訓練所（中訓）ですね。建大とも言いましたが。きょう、テーマをつけたのは、皆さん、うれしいときというのは、やっぱり心は躍りますよね。あわせて、会いたい人がいるかということですよ。やっぱり、どんなに距離が遠くても、会いたい人がいれば、時間とか距離は関係なく会いに行きたいというのが人間ではないでしょうか。そんな中で、私は、この中央訓練所でたくさんの思い出をつくることができました。

人にはそれぞれ原点というのがあると思うんですね。皆さん、原点はどうでしょうか。私の原点は、もちろん建大、中訓、人にあります。建大で行軍をやったんです。この行軍のときはおもしろかったですね。最初に班長を決めるんですけど、行軍をやっていくと重いものを背負ったりするとかするものですから、人間性がぼろぼろ出てくるんですね。もう一回、班長を決め直すと全然違う班長になりましたね。そんな面で、概念を碎かれました。

そして、環境が意識を変えました。いつも富士山が見えました。動かない富士山。その富士山を見ながら、自分を考える男になりました。自分を見つめたというんですね。非常にきゃしゃな、格好をつけてやっている自分を見つめました。何のためにやっているのかなと思いました。

このときに、「使命」という言葉をよく言いますが、簡単に言ったら命の使い方ですよ。

きょうもニュースがありました。高校生の子どもが、自分は必要ないと思われたので死にましたという自殺の遺書が残っていたと、こんな報道がされました。

私は友がいました。この友というのは、格好をつけているときの友じゃなくて、本音で、苦しんだり、泣いたり、また笑ったりしているときの本当の友というのを見つけることができました。そして、優しくて厳しい師がいました。ヨシトメ先生という方がいらっしゃいました。本当に、厳しい師だったからこそ、逆に優しく感じました。単なる優しさというのは、余り子どもたちも求めてはいません。

そこで聞きたいのは、皆さんは、今、ここにいらっしゃいます。皆さんの原点はどこにあるかということを知りたいんです。そして、その人はどんな人だったですかということ。皆さんが、今、ここにいらっしゃる原点をつくった方が必ずいるはず。人との出会い、または場があったと思うんですね。

その余白のところに、皆さんの原点になった方を書いていただけますか、お名前を。じゃあ、書いてみてください。その余白のところに、皆さんの原点になった方のお名前を、ちゃんと覚えてますかね。きょうは、書いたり、立ったり、話したり、声を出したりすることをしますので、単なる、ぼーっと聞いているわけにはいきませんので、よろしくお願いします。

原点になった方、名前を書いてみてください。または原点になった場所でも結構ですね。書きました？ 書いたならば、ちょっとお隣の人とシェアしたいと思います。紹介しながら、こういうところで私はこの人の原点があったんだよとか、この場に行って、私はこういう原点を持ったんだよということを、ちょっとお隣の人と1分ぐらい話し合ってみてください。ご紹介ください、どうぞ。はい、格好をつけずにどんどんしゃべる。

よろしいでしょうか。こうやっていると、1人の人がいるんですよ。1人の人はしゃべれません。1人の人は、どなたかの隣に行ってください。必ず2人ぐらいのペアになってください。じゃあ、1人の方は立っていただいて、お2人ペアぐらいになってください。素直にお願いします。どうぞ、移動してください。ビューティーペア。そこ、離れてますね、近づいてください。即行動、はい、どうぞ、どうぞ。いいですか。

次、行きます。ちょっと考えてもらうとわかるのは、建設を学んで建設の道に行きよかったんじゃないかと思われそうですが、何で教師になったのか。変なやつですよ。ものづくりをしていると、やっぱり人づくりですよ。その人がどういう人なのかによって、物は変わって

きます。そんな中で、私は建大から、昼間、土木、昔で言う土方をやって短大に行きました。富士短期大学というところの2部に。富士が近かったから富士はいいのかなと思ったら、富士短期大学って高田馬場にあるんですね。何であるのかなと思いましたが、富士短期大学の2部に通いました。

そして、玉川大学の通信教育を受けて、何と教員に受かってしまったんですね。いやあ、これはしびれました。受ければいいかなと思ったけど、受かっちゃってみると焦りますね。単位を6単位しか取ってなかったものですから。それから必死になってやって、気づいたら校長になってました。

子どもたちは、よく言いました。「校長先生、絶好調！」と、必ずこう言うんですね。これを大きなイオンのところで言われたときは、ちょっと恥ずかしいんですけども。「あっ、校長先生だ。校長先生、絶好調！」と、こう言うんですね。それがとてもうれしくて。

何で校長になったのかというと、まともな校長に出会えなかったからです。ちゃんと認めてくれる、ちゃんと褒めてくれる、本気でやってくれる、本気で叱ってくれる、こういう校長に出会えませんでした。その結果、私は、自分で校長になろうと、こう思いました。

校長になった後、定年になってやめました。やった学校は、大体、困難校という、誰も行きたくない学校に行きました。なぜかという、48歳で校長になったので、ねたまれるんですね。行きたくないところというのは、大体、学校事故、それからモンスターの集まり、そういうところを3校、校長を務めました。それが、すごいよかったんですね。

その結果、千葉県の新任校長を育てる責任者をやってくれと、こう言われました。定年になったときに。私はお断りしました。なぜかという、教育委員会にも文句言うし、いろんなことやるから、私になつたら困るんじゃないですかと言ったんですけど、県のほうは、ぜひ、そういう人になってもらいたいと。だったら、私は、講師を選ぶとき、自分が選ぶ講師だから文句言うなよということで講師を選ばせていただきながら、自分も講師になって、本当の話をいろいろさせていただきました。上辺じゃない、行政っぽくない話ですね。本音の話です。

そんなことをやっていたうちに、新任校長の育成を、数年、頼まれて、今もお願いをされて、来年も引き続きやります。リーダーを育てるというのは、校長が臆すると教員も臆します。そして、校長が保身になると教師も保身になります。そういうふうな保身の先生からは、いい子は育ちません。なおかつ、そういう先生に*見合っちゃったら、その人の*スキルに見るから、いい子どもたちが全然評価されない。やっぱりリーダーの器はとても大事なんですね。そうい

う面で、校長先生にいろいろ厳しい話もさせていただきます。そうなんだけど、意外と人気があって、毎年、オファーが来るんですね。

「企業講師」って書いてあります。企業が求める人間も、学校の先生が求める人間も、基本的には同じなんですね。そのことが、すごいわかってきました。

この後、ただの人というのは、定年になって仕事がなくなったときには、地域貢献、今、町会の副会長もしていますので、そんなことをして、ただの人に戻ればいいかなと。いつ戻れるかなと思っています。

そこで、学校には、よく学校目標ってあるんですね。ぱーっと書いてある。「挨拶のできる子」とか、「元気な子」とか、「思いやりのある子」とか、「頑張る子」とか書いてあるんですね。そうやって、新任の校長さんが来るんですけど、意外と、「挨拶のできる子」って、こう言うんですが、実は、挨拶のできない校長さんとか教員はたくさんいます。大体、書いてあるんですね、挨拶の何とかってね。これ、全然やらない人がいますね。

私は、倫理法人会というのに入らせていただいて、非常に、この挨拶のところは共感するところがあって。実は、学校でも、新任校長会でもやっています。新任校長は、千葉県で毎年300人、生まれますので、その300人の新任校長さんも、今、5年目になりますから、3×15で1,500人ぐらいの校長先生の育成をしています。

ちなみに、「あいさつ」の「あ」は何でしょう。「明るく」ですね。暗い挨拶は厳しいですよ。じゃあ、「あいさつ」の「い」は何でしょう。「いつも」ですね。「あいさつ」の「さ」は何でしょう。「先に」ですね。そして、「あいさつ」の「つ」は、「続ける」ですね。こういうことですね。

それから、返事というので、返事ができる人で損した人はいません。返事のできないので損する人はいます。皆さん、「はい」と言うときに「は〜い」と言う人もいます。嫌々ながら。本当の「はい」は「っ」が入ります。「はいっ」と切るんですね。こういうことは、卒業式のときに子どもたちに1回だけ教えます。印象に残るように教えますね。こういうのをぜひやっていかなきゃいけないんですが、「やってみせて」って必ず言いますね。教育現場で一番だめなのは、大学の教育現場の先生は、やって見せない。これはこうあったほうがいいなとは言いますよ。でも、「やって見せて」といったらできません、研究者は。実践者だからできるんですね。私たちは、実践者を育てているわけですよ。

そう考えてみると、研究者もとても大事ですけれども、やっぱり実践を見せなきゃいけないということで、今からやって見せてということですから、みんなでやってみましょう。行きま

すよ。

それでは、ご起立ください。

あいさつの「あ」は、と私が言いますので、皆さんは「明るく」と言って下さい。

あいさつの「あ」は、会場から「明るく！」

暗いですよ。もっと明るくいきましょう。

あいさつの「あ」は、会場から「明るく！」

いいですね。その調子ですよ！

あいさつの「い」は、会場から「いつも」

いいですね。

あいさつの「さ」は、会場から「先に」

その調子ですよ！

あいさつの「つ」は、会場から「続ける」

素晴らしい。

応用ですよ。私に返事ではなく、挨拶を返してくださいね。

「おはようございます」会場から「おはようございます」

返事ではなく、挨拶ですよ。

「いらっしゃいませ」会場から「いらっしゃいませ」

「ありがとうございました」会場から「ありがとうございました」

素晴らしいです。ゆっくりとお座りください。

挨拶は人の基本なのです。返事ではありません。先にするから挨拶なのです。

こんなお歴々の方たちをこうやってできるのは、非常に快感ですね。ありがとうございます。

ところで、なぜ、皆さんはこの職につきましたか。そして、もう一つ聞きたいのは、今、どんどん青年たちも、また、これから頑張ってもらいたい人たちも、やめようというふうにする傾向が非常に強いです。皆さん自身は、やめようと思った、その経験はありませんか。その理由は何でしょうか。そして、さらに、なぜやめなかったんですか。その理由は、そこにキーパーソンはいましたか。

まず、その余白のところに、この職についた理由、一言、やめようと思ったことがあったら、

「ある」、その理由はこれだから、「人間関係」とか。なぜやめなかったか、それはこうだったから。はい、書いてみてください、どうぞ。またシェアします。

私は、校長のときに、3回、辞表を書きました。教育委員会とぶつかったり、いろいろなことがありました。保護者から訴えられるとか、理不尽なこともありました。そんなときに、やめようと思って、こんなことやってられるかと思って辞表を3回書きました。

なぜやめなかったか。先輩が、「大久保、おまえがやめるならいいけど、俺たちの*ためにやめないでもらいたい」と、こう言いました。その結果、3回ともやめずに最後まで全うすることができました。

皆さんは、どうでしたでしょうか。じゃあ、シェアしましょう。お互いに、どうぞ。紹介、話してみてください。

ありがとうございます。提案の1です。若者を救えるのは誰かということですね。自信を失う若者を育てているのも、学校でもあるし、家庭でもあるし、社会でもあります。私はなぜ教員になったのかというと、やはり家庭で見放された子たち、社会でもドロップアウトした子たち、でも、学校の先生が1人でも信じて励ましてやれば、自殺はしません。「おまえは必要なんだよ」、「おまえにしかできないことがあるんだよ」と言い続けます。それができるのは教師だなと思います。

そんな中で、私は、小学校の教育と幼児教育はとても大事だと思います。そのときに本当になって言ってくれる先生がいれば、基盤ができます。中高だと遅いときがあります。私は、そんな面で小学校の教師を目指しました。

これ、みてください。この子が自分の担任している子どもだったら、教師はどうでしょう。どういう言葉を添えるでしょう。子どもが自殺したときに一番厳しくなってくる。なぜとめられなかったのかと思います。そこで聞きたいのは、あなたの子どもだったらどうしますか、知り合いの子どもだったらどうしますか、さらに社員の子どもだったらどうするのか。

皆さんはご存じだと思いますが、世界で一番青年が自殺する国はどこでしょうか。どこだと思います？ 日本ですよ。韓国を抜いてますね。その国は正常でしょうか。じゃあ、誰がそうしているんでしょうか。自殺する原因の一番は、皆さん、何だと思いますか。青年に聞いたときに。何であなたはそういうのを選んだのって。きっかけは、学業不振です。勉強できない、「だめだ」と言われる。いいですか、こういう価値観は正しいんでしょうか。

そんな中に、比べる学校があります。皆さんも比べられて育ってきているはずですよ。そして、

責める教育があります。あわせて、自己肯定感を奪い取る社会があります。なぜできないんだ。こういうふうな社会の中で、子どもたちは、青年たちは死を選ぶんですよね。これは当たり前ですよ。

提案2です。本物の体験は一生忘れないということです。いいですか。ここからが肝です。重機体験、これは、富士の訓練センターで、私は、菅井先輩にもお願いをして、子どもたちにさせています。もう本当にね、こんなものが動くのかと。ガンダムみたいな世界ですよ。これを動かしちゃうんだから。さあ、その子どもはどんな表情か。これから出てくる子どもは、不登校の子です。学校にも行けてない、そして、子どもたち、親から見ても、いろいろな課題のある子、その子がどんな表情か。こういう表情です。本物に触れているから。すごい楽しかった。実は、これだけの力が、建設現場にも、本物にはあるんですね。加えて子どもたちが、富士山の登頂までの時間、65時間とありますが、その間でこういう経験をさせています。

やがて、その体験は、本物のオペレーターをつかっていくことになるんですね。さっき言ったように、早い段階でこの経験をさせることが、実はとても大事なんです。ある程度、決まってしまうじゃないということですね。未来のオペレーターになるだろうと私は思って、本気で言ってます。「なったらいいな」じゃありません。

実は、私、富士登山に子どもたちを連れていってます。この後、動画を見てもらいますが、何でかという、自分の子が不登校になったからです。学校の先生に、部活のときに「おまえは要らない」と言われた。その結果、不登校になりました。次男も同じような経験をしています。校長先生なのに、自分の子どもは2人とも不登校です。何でかなとすごい感じました。焦りました。そのときにたまたま見えたのが富士山でした。ここに登らせてやりたいと。誰か登らせてくんねえかなと思ったら、誰もいない。じゃあ、自分でやっちゃおうと思って始めたんですね。

この、今、出ている子は、吃音があります。ですから、学校に行ってもいろいろな面で苦しみます。富士山に登っている最中に泣き出しました。「もう嫌だ、登れないよ」、こんな話をしました。そんな動画をこれから見てもらいます。

どうぞ、お願いします。

(動画開始)

これは8合目ですね。3,000メートルを超えています。白雲荘というところに1泊、泊まります。富士山は怖い山です。去年登れたからことしも登れるという判断はしません。

16年間やってまいりましたが、1回も同じ天候はありません。全員無事故で登らせていくと

きに、この子どもたちの半数は不登校です。中には、脳性麻痺、ダウン症の子もいます。

一番反対するのは、親と先生です。「この子は校庭1周もしないのに、先生、富士山なんか行かせられませんよ」と言います。「先生、うちの子は、連れていったら迷惑かけると思いますよ」と、こう言います。その子どもたちの集まりです。

この子どもたちの表情が、これから変わっていくのを見てください。学校では課題のある子、こういうやんちゃな大学生もいるんですね。これも、今、教員になってます。実は、この彼は、もともとは子どもとして参加しました。その後、今度はサポーターとして参加し、今、もう現職の教員になっています。

今、私の隣に出てくる子がいます。この子は小人症です。体が大きくなりません。いろいろな面でいじめられて、今、アメリカの学校に行って、この富士山だけには来ます。学校よりも富士山のほうがよっぽどきついです。登っていくのは。ところが、半数はリピーターです。毎回、富士山に来る。学校には、1カ月ぐらい行くと、また行けなくなる。

この雲を見ていただくとわかりますが、これからどんどん雲が上がってきますので、天候は乱れていきます。

雲海ですね。これが、後で雨になってきますね。ちょうど12時ですから、そろそろ起きて、子どもたちを起こして、登山に最後のトライをするわけですが、外は、風と雨の状態でした。今の段階では登れない。そして、もう一度、寝かせました。朝方、急変します。ここで、何人かの学生のリーダーを集めて話し合いをしますが、実は、みんなが寝ているうちに、私は頂上まで登っておりてきています。すなわち、予察をしないで危険にはさせません。頂上がどうなっているかということを確認してトライをさせます。これが基本です。ですから、今まで無事故で600名近くを登らせてます。年中さんから高校3年生まで。半身不随の子もいました。

ここで勝負をかけます。私は、上のほうが晴れているのはわかっています。ただ、風のぐあいがあるので、風をどうやって防ぐのかと考えながら、これから自分の身近なサポーターを集めて話し合いをします。そのときに、指示を出します。当然、下山も想定してますね。

ここから、この大人たちの表情が固まっていきますので、見ていてください。

何て指示をしているか。班長の中には小学校2年生もいます。さっきの小人症の子もいます。そういう子どもたちが班長です。自分の班の中には大学生もいます。ほかの人のことをふだんは考えられないで決められている子どもたちを班長にしているわけです。その子どもたちが、自分の班の人たちの意見を聞いて、そして、自分たちの意見をまとめていきます。それによって、この登山

を執行するか、しないかを定める。「子どもの意見を聞く」というふうに私は言いました。

子どもたちの表情を見ていてください。子どもの中の大人に話しかけています。周りの登山客は、全員下山です。

この子は、小学校5年生です。4年生から不登校です。ふだんはほとんど話さない子たちです。話せない子たちですね。

これは3年生です。目を見ていてください。

この子は、高山病になったので泣いた跡がありますね。頭痛と吐き気が出ますから。

この子は、余り話せない子なんですね。にこにこしてますけど。誤解を受ける子ですね。でも、この子も班長。

この子は4年生です。もう年齢を超えていますよね。

この子も3年生です。もう脳の中は必死になって考えてますよね。

この子は、毎年、高山病になるので、吐き気と頭痛で、つらい中、登っています。

私の左右にいる、向こうの青いのが私の息子なんですが、この子も不登校だった子ですね。手前にいるこの2人を先登隊で行かせます。その結果、様子を見ながら指示をこちらに回すという形ですね。私はもう既に登っていますから、大体状況はつかんでいます。

そこで結論は、できるところまで登ってみようという話になりました。

雨が降っているので、リュックにビニールをかぶせていますが、その動きを見ると、風が非常に強いのがわかると思います。よって、子どもたちを飛ばさないように、学生たち、大人たちが体を張ります。

今まで経験したことのない緊張感が、ここで生まれます。

天気はよくなってきたんですが、高山病の状況が出てきました。一番つらいときですね。

学生も高山病になってます。もう表情でわかりますね。気持ち悪いんですよ、頭も痛いし。

私がこれを始めようと言ったときに、教育委員会からすぐ連絡が来ました。「現役の校長がこんなことやっていいのか」と言われました。私は、自分の学校の子だけじゃありません、やるんだけれども、来たい人があったら来なさいという話をしました。その結果、たくさんの子どもたちが集まってきました。しかし一番大事なのは、安全に帰して当たり前ということです。危険に持っていくことはできません。どこまでが危険で、どこまでが安全かという線引きがとても大事になります。

いよいよ頂上が近づいてきます。ここが、一番危ないですね。この中で山に登ったことがあ

る方はわかると思いますが、一番事故が起きるのは頂上が見えたときです。油断をします。ここからきちんと締めていかないと、実はけがをします。

ふだんは、人のことを励ましたこともないような子たちが声を出し始めます。学校でもだめな子、家庭でも課題のある子、地域ではほとんど見えない子たちが、必死になって友達に声を出し始めます。

さあ、子どもたちの表情を見ていてください。

おかげさまで、頂上は誰もいなかったの、売店も全部閉まってました。あけさせていたでいて、独占させていただきました。

(動画終了)

子どもを信じる。「信じる」ということが、本当に私たちはできているかなという気がします。そして、判断をさせる。そのときには、当然、予測もしています。そして、乗り越えさせていく。どこを乗り越えていく、自分自身を乗り越えさせなきゃいけない。富士山は自分の中にあると私は思います。そのことを子どもたちに体験させていくこと。だから、富士山が目的ではありません。

提案3。本気で叱る人、励ます人、この提案をしたいと思いますが、自分を語る、長すぎず。大体、校長の話は長くなります。社長の話も長くなります。今だから言える私の試練。皆さんは、どうでしょうか。死にたいとか、もうだめだと思った経験はきっとおありだと思います。これだけのリーダーになってくると。一番の敵は誰ですか。そして、今の試練は何ですか。試練のないことはないと思います。そう考えてみると、自分を語るということはなかなかできず、短く話をするということもなかなか難しいです。

そんな中で、1年生に聞きました。小学校1年生ですよ。「あなたにとって一番いい先生は誰だった？」と聞きます。子どもたちは何て答えるでしょう。予想に反してました。「本気で叱るけど」と最初に出ました。「優しい先生」というんじゃない。「本気で叱るけど、本気で考えてくれる、本当に優しい先生が大好きだ」と、こう言いました。子どもはわかっています。本気で叱ってくれてるのか、その人が本当に自分のことを思ってくれているのか。1年生でさえもわかります。言葉だけじゃないということです。

これは、芦田愛菜ちゃんが、この前、天皇の即位のときにも話をしましたが、すばらしい話でした。

皆さん、少年院に行かれたことはございますか。また、自殺の現場に出会ったことはありま

すか。私は、実際にあります。新松戸の駅のホームで待っていたときに、Tシャツの青年が飛び込みました。電車はとまりました。その中にたくさん人が乗ってました。今、人身事故が日々のように起きています。その半数近くが青年だと言われています。正常でしょうか。

少年院に行ったときに、私、この八王子のところにちよくちよく行くんですが、こう言っていました。「本気で叱ってくれなかった」、「寂しかった」、そして大事なのは、「俺はどうでもいいんだと思った」と。こっちから見れば、ちょっと怖そうな風体だから、余り言えないかなとか、言ったらやめちゃうのかなとか、こう思うかもしれませんが、「本気で叱ってくれなかった」ということを彼らは話します。

提案4。私は、あなたみたいになりたい。これ、大事じゃないでしょうか。昔はヒーローもいました。隣でも、今、工事をやっていました。これ、格好いいじゃないですか。どうですか、見て。皆さん、やっていらっしゃると思いますが。なぜ見せないんですか。

僕は、自分の学校の近くで陸橋の工事をしていました。その方たちが挨拶に来た。私はお願いをしました。「これからされるなら、ぜひ、真ん中に見えるようにしてもらいたい」と。「この陸橋がどうやってでき上がっていくのか、そこに格好いい人たちがたくさんいるということを見せてもらいたい。ですから、間をあけてください」と言いました。子どもたちは、毎日、きょうはここまでできたよ、きょうはあの人があんなことをやって、こんな大きな機械が入っていたよと話をしました。子どもたちはすごい興味を持ちました。小さいときに、よく子どもたちは、うちの子どもは大きな機械のことを「ガーガー」と言っていました。すごく好きでした、工作機械。でも、今はほとんど見せられません。ですから、いつの間にかでき上がってる。そこで働いている人の姿は目に入りません。格好いいじゃないですか、私はそう思うんです。

せめてこんな形になればいいんでしょうけど、そこでキャリア教育の問題を言います。今、学校では、小学校、中学校、高校とキャリア教育をやっています。就職、その中に建設現場という体験はありません。危ないから。そして、漁業もありません、農業もありません。ケーキ屋さん、何とか屋さんというところに行行ってやる。私は、キャリア教育こそ、まさに建設現場でできることをさせればいいと思います。そういうふうなのは、こちらから*のりしろを出さないと学校からは来ません。できれば、それを小さいときに私は経験させてもらいたいなど、こう思うんです。

そこで、皆さん、うちの父と母は今から4年前に亡くなりました。9月27日に父が亡くなりました。父は中島飛行機で零戦のエンジンをつくっていた人間でした。そんなすてきな父だっ

たんですが、それをやっていたんだというのは、死ぬ1週間前に聞いただけでした。その父が亡くなって、その父の脇にラブレターがありました。自分の妻に宛てた手紙ですね。九州の佐賀県の人間だったので、口の重い人でした。

私の母に宛てたラブレターはこう書いてありました。*「母フユコ、なすべきことをなし感謝している」と書いてありました。私は、それを大きく引き延ばして、別の病院に入院している母のところに行ってきました。母はそれを見て、自分のことをそう思っていてくれたんだと思ったのか、その2時間後に亡くなりました。ですから、両親を一遍に失いました。「非常に仲がよかったんだね」とみんな言います。そうでもなかったんですけど。「そういうことにおきましょう」と話をしています。

さあ、皆さん、自分、あとわずかの命だと思ったときに、会いたい人はいますか、どこにいますか。

今、幾つか項目を書いてみました。会いたい人のいるところ、○をつけてみてください。はい、どうぞ。

では、聞きますね。幾つか書きましたので、手を挙げてもらっていいでしょうか。会社にいるという人。

(挙手)

少ないですね。これがたくさん上がるとすごいんですけどね。
家庭にあるという人。

(挙手)

そうあってもらいたいですよね。

地域にあるという人。

(挙手)

ああ、いいですね。

友人にいます。こいつには会っておきたい。

(挙手)

これもすごいですね。これは家庭と同じぐらいですね。

先輩にいます。

(挙手)

先輩は、そんなに多くはないですね。年配者の方にはいらっしゃるけど、若い人はあんまりい

ないですね。

恩師にいます。この恩師に会っておきたい。

(挙手)

なるほど。はい。

もう一度、亡くなった親に会いたい。

(挙手)

これは大きいですね。

さあ、そこで、あなたは誰の会いたい人になっていますかということ……。あなたに会いたいという人は、いらっしゃいます？ どうでしょう。あなたに会いたいと思っている人、きつとこの人は思っている、旦那だとか女房だとか、書いてないと困っちゃいますよね。「会いたくねえ」とか言われたらね。

さあ、そこで、あなたに会いたい人、そこに5つ書きました。書いてみましょう。5つ書けますか。書けなかったら寂しいですよ。

何人ぐらい書けましたかね。あなたに会いたいと思っている人。0というのは厳しいですよ。自殺しないでください。あなたに会いたいと思っている人、何人いるんでしょうね。ここは、とても大事なことです。要は、自殺する子どもたちは、自分を大事に、自分の存在価値はないと思っているんですね、ほとんどが。

そう考えてみると、会いたい人がたくさん、自分のことを思ってくれているなということに意外と気づかないんじゃないでしょうか。ここに気づいていくことはとても大事だと思います。

そんな中で、忙しいですね。忙しいは「心を亡くす」と書きますけれども、私たちは責めることが意外と得意です。責める、自分も相手も。そうすると、萎縮したり、窮鼠猫を噛むで反旗を翻したりしますね。また、比べるのも大好きですね。そうやって育ってます。何かというと、成績。あなたは、これ、何でできないの。妹はこんなにできるのに、何であんたはできないのと、こう比べられる。そうすると、顔色を見るようになります。学級の中でも、先生の顔色を見るような子どもたちは、大体おかしくなってきます。子ども同士の顔を見るんだったらいいけど、先生の顔を見て動くというのはおかしいですね。

そして、優越感。あの子よりも、俺はできてる。学級の中で、学級をつくる時にどうやってやるかということ、一番厳しい子、そういう子たちを変えていきます。そうすると、俺より下だっ

たやつが、何であんなに頑張り始めたんだと、こうなりますね。徐々に学級は、学力も上がっていきます。

そして、諦めるということですね。もうだめだ、しょうがない、やったって。今、いろいろなニュースを見たって、元気になるニュースはありません。青年たちが投票に行きたいと思うような報道はほとんどありません。みんな、勉強して優秀になったって、あんなことやるのかと、こういうふうな青年たちをしているのは誰ですか。そのメディアとして、非常に大きな影響を与えています。

私は、ここでいつも言うのは、責めず。これ、難しいですよ。そして、もう一つは、比べず、諦めずという。ここで大事なものは、比べないということができるかどうか。自分の子ども、俺がこれだけ頑張ったんだから、おまえだって頑張れるぞと私はやってしまいました。

その結果、子どもに大きな負担が来ました。結果的に不登校になりました。本当は、認めてやればよかったんですね。その認めるということができませんでした。その結果は結果として出てきました。

責めず、比べず、諦めず。私は、不登校の親御さんにも言います。たくさんの相談を受けたときに、必ずこのことを話します。責めたって何もよくなるよ、比べたって焦るだけだよ、こういう話をします。

そこで、私は倫理法人会に入っていますので、そんな中で聞いた言葉の中に、資本主義から倫理資本主義への転換という話がありました。

私は、それを教育につなげたときに、最大の教育環境は教師自身です、人です、目の前にいる親です、身近な人です、それが最大の環境ですと。あの人、苦しんでるし、あの人、あんなところもあるけど、ああんりたいよなって、こういうのが実はとても大事です。

そして、自分が人材だ、俺は優秀だと言っている人間は大したことはありません。その人が育てた人が優秀であれば、育てた人が一番の人材。

そして、一生懸命やるということをよく口にする人がいます。学校もブラックと言われます。「一生懸命」という言葉は、僕は嫌いじゃないんですが、言いすぎる人がいます。やってもねえのに。私は、誠実に丁寧なやりなさいという話をします。そうでないと、できないことも「やる」と言って潰れる人がすごくいます。誠実にやってみろ、丁寧にやってみろという話を、子どもたちや先生たちにします。これが、私はとても大事な気がします。

そして、一流は謙虚です。二流は、必ず偉ぶります。一流は力がある。だから、偉ぶりません、

謙虚です。

一番モンスターで怖いのは、にこにこする人が一番怖い。怒ってくる人は、全然怖くない。にこにこしてきたのは怖いですよ。

そういう意味からすると、一流は謙虚、二流は偉ぶる。私は、こういうのを今までたくさん、何千人、何万人という教員、そして子どもたちとかかわりながら、偉ぶってるという姿を見たときに、誰もついてきません。謙虚は力がある証拠ですよ。

気づくと、こんなことやってました。亜細亜大学で親塾やってます。親も苦しんでいます、いつの間にか親になってるから。そんな中で親塾はえらい人気で、毎回、親御さんたちがたくさん来て、私の話を聞いていただきます。私の失敗談も含めて。

それで、倫理法人会にも入らせていただいて、今、千葉県のレクチャーをさせていただいた板橋の副会長とか、自分の店を松戸市東のモーニングの会場にさせていただいています。

千葉県では、新任校長の育成もさせていただきながら。

その下のところを見てください。日本教育新聞のウェブの生徒指導、小学校段階での考え方って、これ、連日配信してます。ここには政治のこと、それから社会のこと、子どもたちのこと、会社のこと、全部書いています。生徒指導の基本は、小学校にあります。中学校、高校じゃない。問題を起こす子が生徒指導じゃない。自分の持っている力を存分に出せるようにさせてあげるのが生徒指導です。それを間違えて、腕力のある人たちが、何か中学、高校と生徒指導をやっているのは間違いですね。自分を自分らしく生かせることが大事ではないでしょうか。

社会貢献のお願いの中で、ぜひ、ゴルフに行く1回を節約いただいて、飲み会を1回節約していただいて、先ほどの子どもたちに応援いただければありがたいと思います。

5泊6日やっておりますが、なかなか、不登校の子になると大体片親家庭になる家庭が多くて、きょうだいが行って、お兄ちゃんが行くとお姉ちゃんも行きたいんだけど、また下の子も行きたいんだけど、お金がないので我慢しますという子があるので、毎年、私も個人的にこのくらいの金額を出しています。ぜひ、応援いただければありがたいと思います。

さあ、そこで最後です。女房。大事にしていますか、どうでしょう。私は、離婚届を3回ぐらい書いたことがあって。うちの奥さんは、天然なんですね。ですから、わけわからないことを言うので、もうまいったなと思ったことがあって、3回ぐらい書きました。1枚は破りました。2枚目も彼女は破りました。3枚目は破らないで持っているのが怖いんですけど。

その女房を、自分の*属物だと思っていた自分自身が非常に愚かになりました。今は、離婚

しないでよかったなって、すごい感じてます。

そこで、建設産業リーダーの合い言葉、「過去と女房は変わらない」。女房を変えようなんて思ったら大間違いなんですね。そして、自分と未来は変えられる。まさに自分を変えていくことが、実は一番楽しくて、自分に返ってくるんですね。周りを変えようたって、変わりません。子どもも変わらない。やっぱり自分自身が変わった分しか変わらないんですね。それが、一番確実で、できることです。私は、そこに素直になっていくことがとても大事だなと、こう思いますね。

そうしたら、みんなで最後にこれを言って終わりにしたいと思うんですね。じゃあ、全員、ご起立ください。ゆっくりと。血压の高い方はゆっくりと立ってくださいね。

それでは、建設産業リーダーの合い言葉、私が言いますので、その後、続けてください。気持ちを込めて言うんですよ。いいですか。

建設産業リーダーの合い言葉。

過去と他人は変わらない！

(過去と他人は変わらない！)

余り思っていないでしょう。ちょっと声に出ちゃうの。はい、もう一回、行きますよ。

過去と他人は変わらない！

(過去と他人は変わらない！)

自分と未来は変えられる！

(自分と未来は変えられる！)

ありがとうございました。お座りください。(拍手)



一般社団法人 建設産業専門団体連合会 副会長
岩田 正吾

本日は、一般社団法人建設産業専門団体連合会の全国大会に、全国各地から多数ご参加をいただきまして盛会裏に開催できましたことを、主催者としてまことに喜ばしく、また、厚く御礼申し上げます。また、多くのご来賓の方々にご臨席を賜り、重ねて御礼申し上げます。

冒頭、才賀会長の挨拶にもありましたが、建設業界の果たす役割は年々増している一方で、建設業の就労者は年々減少しております。若者らが建設業に入りたいと思える産業づくりが、担い手不足解消の最善策であることは周知の事実ではありますが、その現実はまだ遠い道のりであります。

しかし、日本においても、アメリカやヨーロッパのように、建設技能労働者がしっかり休暇が取れて、高い賃金がもらえて、建設業への入職希望者が絶えない産業にすることは決して不可能ではありません。そのためには、働き方改革、技能労働者の処遇改善、専門工事業者の適正な評価などの取り組みについて、専門工事業みずからが、我々が積極的に提案を行っていき、行政や総合工事業界との連携をしていくことが重要となります。

本日の大会においてご講演いただいた佐々木様、大久保様のご講演を糧に、来てほしい業界から入りたい業界へと、建専連一丸となって取り組むことをお誓い申し上げ、最後になりましたが、本日、ご参加いただきました皆様、大会運営にご協力をいただきましたスタッフの皆様、改めて厚く御礼を申し上げ閉会の言葉とさせていただきます。

本日は、まことにありがとうございました。(拍手)

司会：岩田副会長、ありがとうございました。

以上をもちまして、全国大会を閉会とさせていただきます。本年度の全国大会も、おかげさまをもちまして無事終了することができました。心よりお礼を申し上げます。

以上をもちまして、本日のプログラムは全て終了いたしました。皆様、どうぞお気をつけてお帰りくださいませ。なお、お帰りの際は、係員の誘導に従ってお進みくださいますようお願い申し上げます。

本日は、まことにありがとうございました。(終了)



一般社団法人 建設産業専門団体連合会

代表者 会長 才賀 清二郎

所在地 〒105-0001

東京都港区虎ノ門 4-2-12 虎ノ門 4 丁目 MTビル 2 号館 3 階

TEL 03-5425-6805 FAX 03-5425-6806

URL <http://www.kensenren.or.jp/>

e-mail info@kensenren.or.jp

経 緯 昭和 39 年 12 月 社団法人 全国建設専門工事業団体連合会を設立

昭和 58 年 07 月 任意団体 建設産業専門団体協議会を設立

平成 14 年 06 月 建設産業専門団体協議会と（社）全国建設専門工
事業団体連合会が統合し、新たに（社）建設産業
専門団体連合会として再発足

平成 25 年 04 月 一般社団法人へ移行